

裸体

息の白

霜の白を

焼くような

日の控える東雲

剥き出しの心に映る
裸の幹

冬の人よ

一糸纏わず

凍てつく大地に

枯、として立ち

その枝は

空に広がる毛細血管

やがて来る萌芽を待ち

ついには

その漲る気にも

斃れぬ身体を手に入れたのだ

対峙したその姿を

がりがりり

幼気な肌に刻みつける

冷ゆる風

それさえも燃え

赤く

赤く

東ひむかしに朝が来る

星を乞う人

おおこの狭い天蓋になお
疎らな星の

何たる叙情歌

星の下で命は

一片の不実もなく一人

その宙の

純化した黒

真の闇へ

姿を消すその日まで

星は懸命に輝いて

それを寂しいとはいわない

きらきらと

命は寂しい

命は揺れて

星の下でふるえ哭く

その煌めきが

清けき音が

宇宙の中では響きあう

秋の女神

私は佇む
果樹園の果樹
この胸にぶら下がる
二つの乳房
大樹の未来を胸に
下腹部に思いがある

私は女なりしもの
母なりしもの
遍く大地に果実を落とす
種子を抱いた慈愛の実

私だけの痛みがあり
私だけの涙がある

私は女なりしもの
母なりしもの
四季と交歓し
大地を彩り
潤し続け
育み続け
何時の日か
枯れた乳房を胸に
大地へ還る

私は女なりしもの
母なりしもの
やがては朽ち果て
過去となる